集合行動の概念について

——アメリカ社会学研究の一節——

宇　賀　博

1

アメリカ社会学で興味あることがらの一つは，ヨーロッパ社会学との関係でみるばあい，ヨーロッパの伝統によって影響されると，多くの例では，つぎの二つのことがらのうちのどちらか一つが結果として生じている。たとえば，(1)そのヨーロッパの概念のもつ意味をかえ，アメリカの自由主義的な伝統や社会的ないし政治的文脈にうまくあうように新しく概念を発展させているか，それとも(2)結果としてのゆがみや特殊な条件などおかまいなしに，ヨーロッパにおいて発展させられた概念をアメリカの材料にそっくりそのまま無批判に適用しているか，この二つのうちのいずれか——あるいは部分的にはそのミックスがあるかも知れないけれども——である。[1] おそらく前者がおもな傾向であろうとおもわれるが，それは，「社会解体」(social disorganization)，「社会的諸問題」(social problems)，「社会病理」(social pathology)，「社会統制」(social control) などの諸概念や，また新しくは「逸脱行動」(deviant behavior) といったテーマのとり扱い方をみれば具体的にどういうことかよくわかる。もっとしぼっていうと，「社会問題」(the social problem) と「社会的諸問題」(social problems) とのちがいなどがその代表的な一例ではなかろうか。

前者の社会的諸問題についていえば，少年非行，アルコール中毒，離婚，犯罪，人種関係，マイノリティ・グループの問題，貧困とスラムなど，いわば都市は「悪疫の発生地」であるというジエファーソン以来の伝統とミックスしていて，また他方で，それは少なくともその一部は，人種，国民，民族的起源，信条，宗教および経済的地位のちがった非妥協的な諸個人や諸集団を，「北部アメリカの中産階級白人プロテスタント」のように行動させようとする努力の現われであるという言葉によって要約されるような，一つの努力の領域である。このような中産階級の規範への信仰は，初期には，その観念がしばしばきづかずに受け入れられているという事実があったとしても，絶対的であったし，最近においては，この無意識の仮定はアメリカ社会学者のあいだで公然と表明されるまでになっている。[2]

いうまでもなく，こういう関心領域，つまり「社会的諸問題」は，ヨーロッパの「社会問題」とは大きな隔りがある。それは質的でさえあるし，後者のばあい“より深み”があるという表現がよくつかわれる。それには封建制の欠如というアメリカの自然的な自由主義の伝統と封建制に呪われたヨーロッパ自由主義のちがいがあるとおもわれるが，それゆえに，このヨーロッパの重荷は，少し飛躍した議論であるが，いち早く社会主義的ないし社会政策的な思想状況を生んだ。必ずしもこういうことばかりではないとおもうけれども，およそヨーロッパの「社会問題」はこんな文脈のなかにあって，だからルイス・ハーツがアメリカについて書いているように，このことを理解しないとじつにへんてこなことになる。すなわち，「われわれはヨーロッパの“社会問題”を理解することに困難を感じる。そしてそれゆえヨーロッパの社会民主主義をさえわれわれの反急進主義の呪物主義によって解釈しがちである。われわれはアジアの一層深刻な社会闘争について無知であり，そ

れゆえ反動的な政権をさえ“民主的なもの”と解釈しがちである。」[3] と。

それはともかく，社会問題といえば社会階級間の諸関係（利害の対立）をめぐる手に負えない問題——フォードを乗り廻しているか，それともキャディラックを乗り廻しているかといったこととは無関係な，歴史的にあるいは伝統的に規定された問題として意識されている。産業革命以後のことであるけれども，ヨーロッパの人たちは，アメリカの人たちよりもいち早くこのことを理解していたし，またそれができる状況にあった。アメリカの社会学者たちは，全体の文脈をちっとも考慮しないで切り離した諸部分，つまり犯罪，スラム，離婚などの研究に専念している。かってマンハイムは，たとえば，「…他方，われわれの社会学への要求が，かれじしん興味あるものであり価値あるものであるかも知れないが，この科学にたいするアメリカ人の典型的な貢献に満足できぬいま一つの理由がある。つまり，典型的なアメリカの諸研究が，日常の政治的ないし社会的な闘争においてわれわれの情熱を換起するところの問題とは全く無関係な，それら諸問題から出発していることがその理由である」とのべていた。[4] ミルズふうにいえば「リベラルな実用主義」(liberal practicity) とでもいわうか。アメリカの自由主義の伝統が，ヨーロッパが経験しかつ理解するそれとはちがったように——かりにヨーロッパを基準にすれば——社会学という学問をゆがめてしまったといえる。たとえばヨーロッパの情熱を換起した，うえのような強烈な問題意識は，最初からでなかったにしてもとりわけ二〇年代以降，たとえニューディールの経験があったとしても，アメリカ社会学ではおおかた論争の材料であることをやめた問題であった。たしかさきのマンハイムの指摘も，直接にはライス編の『社会学の諸方法』(1931) の批評として二〇年代の社会学を対象に書かれたものであった。アルベート・ザロモン——かれはヨーロッパからの移住者であるが——は，アメリカは社会学が社会主義なしに実践された唯一の場所であると評していたが，[5] たれもが知っているように，ヨーロッパの社会主義はアメリカの政治において決して重要な力をもたなかった。またある批評家は，——ルイス・ハーツの見解について——つぎのようにのべていた。すなわち，「トックヴイルにしたがって，ハーツはアメリカ人を，自由主義デモクラシーに到達するために，国内の封建主義にたいする反逆を決して必要としない<自由な生れ>とみなしているのである。ヨーロッパと比較して，アメリカは，制限された政府，社会流動および経済的自由をもった自由な国として生れた。同盟のための貴族や敵対のためのプロレタリアートのないアメリカの中産階級は，封建的な位階秩序の苗床が必要であるヨーロッパ・スタイルの保守主義とか社会主義とかの成長を，永久に阻止してしまった。アンシャン・レジームを攻撃する必要のない自由主義者たちは，まじめで，穏健で，現実的であった。非封建社会におけるアメリカの〈保守主義〉は，流動と競争の自由主義的賛美という悪臭を放った，仕事と成功へのブルジョワ的福音であったし，あるいは革新という妖怪に悪夢のようにうなされて，それじたい自由主義エトスの所産である憲法という迷信的偶像を，盲目的な情熱でその胸にいだいたところの開化反対論者のアメリカニズムであった。ハーツの判断によれば，アメリカ文化を威嚇しているところのものは，政府がいつも死んだリヴァイアサンである原子論的な社会において自然権をもった個人というロック的なヴィジョンを，普遍的に，暗黙のうちに受け入れることである。アメリカ生活の自由主義的な現実によって縛ばられた文化は，つまり自由主義は，とり組むべき真正の封建主義にもとづく保守主義を欠くために，無能でドグマ的で，それじたい半ば無自覚的になっている」。[6] 仕合せなアメリカ人は，「社会問題」によって感光力を与えられた社会学を発展させず，また同じ理由から，生きた社会主義をも発展させなかった。じじつアメリカの社会学は「アメリカ的科学」としてヨーロッパとは異ったものになっているし，しかもそこに，社会学が少なくともアメリカでかくも高度に発達した理由の一つがあるようにおもわれる。

アメリカの社会学についてのうえのコンメントは，ここでは，ただ示唆的なつもりでいったので

あるが，それではロバート・E・パークの所説にふれながら，かれの「集合行動」(collective behavior) の概念を中心に，同じように問題を考えてみよう。なぜなら，あとでのべるように，この概念もまた，二〇年代のアメリカの土壌で特殊アメリカ的な概念として展開されているからである。その分析をとおして，わたしたちは第二期の，とくに一九二一年から三七年頃までのアメリカ社会学の一面を浮き彫りにしてみたいとおもっている。しかしながら，それらの特色をはっきりとつかむためには，そのまえに，一九世紀末のヨーロッパにおける社会学思想を眺めておく必要があるし，もうちょっと具体的にいうと，ル・ボンやシゲーレや，またタルドなどの「群衆」の研究の性格について知っておく必要があるだろう。それとの比較をとおして議論をすすめてみたいとおもうからである。

さっそくだけれども，この群衆についての研究がどうして生れたか，その当時のヨーロッパの社会的な背景をまずみておくと，

たとえばフランスでは，一八七一年のパリ・コンミューンでは労働者政府の樹立が企てられて以来，フランス労働者の結成 (1880)，フランス労働組合および職業団体全国連合会の成立 (1886)，革命的社会主義労働党の成立 (1890)，フランス労働総同盟の結成 (1895)，革命的共産主義同盟の結成 (1897)，革命的社会党および独立社会主義連盟の結成 (1898) というように大衆運動が進展した。つまり，このような社会的ないし政治的状況のなかで，ル・ボンは『群衆心理』 (*Psychologie des foules*, 1985) という本書を，ガブリエル・タルドは「群衆と犯罪集団」(*Les foules et les sectes*, 1893) と「公衆と群衆」(*Le publique et le foule*, 1898) という二論文を発表した。また，フランスにおくれて大衆運動が展開されたイタリアでも，パリ・コンミューンに刺激されておこったリヨンの暴動以来，ベネヴエントでのバクニーン主義者の暴動 (1877)，ミラノのイタリア労働党の結成 (1880)，統一されたイタリア労働党の結成(1892)，イタリア社会主義労働党の成立 (1893)，また一八九八年には各地に食糧暴動・市街戦と，国内は騒然たる政治情勢をていした。こういう情勢のなかで，イタリアの犯罪学者シゲーレは，『犯罪的群衆』 (*La foule criminelle*, 1892) と『セクトの心理学』 (1895) を著わし，群衆と集団の心理学を展開した。(南　博「群衆行動と大衆運動」『社会心理学の性格と課題』勁草書房，1965，所収，128ページ参照)

コーンハウザーによれば，大衆社会論には二つの主要な源がある。一つは一九世紀においてヨーロッパ（とくにフランス）社会の革命的変化にたいする作用に根ざす貴族主義批判，もう一つは二〇世紀における全体主義の勃興にたいする反作用にもとづく民主主義的批判がそれであるとのべているが，うえにあげた群衆の研究こそまさに前者で，貴族主義的な立場からする研究であった。[7]それはじつは，大衆の登場とその新しい要求の危険を，「群衆心理」のなかにみてとる防衛的な群衆心理学であった。こんにちまで，文明は「少数の知的貴族」(*une petite aristocratie intellectuelle*) によってつくられかつ導かれてきた。けれども，新しい時代は「群衆の時代」である。しかしすでにみたように，シゲーレが群衆の研究を始めたのは，ストライキ，街上の騒擾，暴力的大衆運動などの頻発する所謂世紀末の不安に刺激されてのことだし，さらに「ル・ボンの恐れているものは，世紀末の不安という如き漠然たるものではなく，却って，一切の社会主義的或は社会政策的なものである。労働組合の活動，労働紹介所の設置，労働時間の制限，鉱山，鉄道，工場，土地の没収，生産物の平等な分配，これ等は，彼の解釈によれば，原始的な無意識に操られる群衆の欲しているものである。新しい時代は“群衆の時代”(*l'ère des foules*) であり，多数者の盲目的な力が“唯一の歴史哲学”である。群衆は，無視することも，軽蔑することも，併し，許容することも出来ぬ或るもの」であった。清水の指摘するように，じつは「群衆に対する恐怖は，民主主義の拡充への恐怖と重なり合っている。群衆の恐るべき力というのは，政治的権利の平等のみを目指す形式的な民主主義を，社会的及び経済的権利の平等を内容とする実質的な民主主義へ発展させようとする民衆の力と重なり合っている。群衆心理は，単に心理の問題でなく，社会の，政治の，歴史の問題である」といえるのである。[8]

だから，貴族主義的批判の立場にたつ人たち

は，一般に反民主主義的な感情を鼓吹されていて，普通選挙権によって政治勢力の拡張を要求する下層階級はもとより，ばあいによっては議会という全く自由主義的な機構をも信用しようとはしない人たちであった。しかも奇妙なことに，これらの人たちの知的な感化は，多くのばあい，イポリット・テーヌ（1828—92）からきていたようである。フランス革命におけるモッブ（mob）とその役割にたいするテーヌのするどい非難は，かれの末完の大著『現代フランスの起源』（12 Vol., 1875–88）にみられるのであるが，そのなかの多くの例は，ル・ボンやタルドやその他の人たちによって引用されるところであった。[9] いわく，「われわれのところでは，赤色分子とボナパルト主義が自由の二種類の敵だ」。普通選挙権は「民衆をおだてる怪物のかくれた場所」だ，と。そしてテーヌによれば，「大切なのは，富裕な，しかも教養ある階級が無知な連中やその日暮しの連中を指導すること」であった。[10] テーヌの思想にとって二つの事件，すなわち，一八五一年のルイ・ナポレオンのクー・デタと普仏戦争の敗北，とりわけ一八七一年のパリ・コンミューンはだいじな出来事であった。テーヌは裕福なブルジョワ家庭の息子であって，エコール・ノルマル時代のすばらしい経歴によってパリで職を与えられるはずであったのに，一八五一年のクー・デタによって地方へ追いやられる。かれの政治思想は非常に危険だったので，独裁者の政府——ボナパルティズム——はこの若い教授を首都におくわけにはいかなかった。かれはまた，この独裁者の体制といっしょになって勢力をもり返そうとするカトリック教会をも非難していた。友人プレヴォ・パラドルの忠告にしたがって，静かにおとなしく学問に没頭して暮すのであるが，このときテーヌは「教育」のなかに人民投票的体制にたいする救済手段を見出そうとしていた。しかしながら一八七一年のパリ・コンミューンもまたかれをひどく失望させた。かれは「わたしの心臓は胸のなかで動かなくなった」と告白している。そしてこの一八七一年のショックが直接の動機となって，さきの『現代フランスの起源』の執筆が企てられたのであった。

一般に群衆研究のトーンはどちらかといえば反自由主義であって，「群衆」の特徴というのは，たいてい，醜悪と残忍，盲目的な感情と被暗示性，愚鈍と無知のカタログからなっていた。ル・ボンやタルドやシゲーレにとっても，自由主義は社会を引き裂いたし，いまは群衆として集まる，バラバラな個人をつくった。たとえば，テーヌのモッブについての不気味な叙述は，ル・ボンやタルドのモデルとなったし，またシゲーレは，『セクトの心理学』の附録として，反議会主義の“*Contre le Pariamentarisme*”という論文——あとになってイタリア・ファシズムのイデオローグによって利用されるが——を書いた。つまり，選挙民群衆や陪審員や議会が，ひとたび群衆に共鳴しようものなら，根深い偏見や原始的な衝動や人種的な性癖や，また動物本能を手ばなしに解放してしまうというのが，シゲーレの持論であった。[11] 人間の合理性という古典的な自由主義の信仰は，ここでは全く攻撃の矢面にたたされている。さきのル・ボンによれば，群衆のなかでの個人というものは，全く人格意識を失い，かれから人格をはく奪した操縦者のすべて指示どおりに従い，かつ，かれの性格や習慣と全く矛盾した行為を行ったりするような，そういった条件のもとにおかれるというのである。だから群衆的人間は，もはやじぶんの行為を意識せず，催眠術にかけられた心のように，ある能力が破壊され，それにつれて他の能力が同時に，おそらく高度に発揚させられる。そして，かれは暗示の影響のもとに，制御のきかない猛烈な動作をともなう行為を行いはじめるのである。[12]

ここで少しコメントを加えるなら，かれらの反自由主義や群衆への不信は，それじたいイデオロギー性をもち，支配者側のそれへの恐怖感を反映するものでなかったか。「一九世紀末四半期のヨーロッパでは，資本主義の発展にともなって，ブルジョワジーに対立するプロレタリアートの抵抗が，さまざまな労働運動，政治運動として，急激にたかまってきた。“大衆運動” mass movement ということばも，本来，このような政治運動を意味するものである。古典的な群衆心理学は，まさに，このような大衆運動の高まりによって，危険を感じはじめた支配者層の意識を反映す

るものであった。」[13]つまり，こういった恐怖感から発する防衛的な性格の群衆心理学 ——大衆社会論の前期的形態——であった。

たとえば世紀末の「群衆」は現象的には群衆——とりわけ貴族主義的な立場——であったけれども，たての軸でいえば，やがてそれが観察者の立場によってマイナスの大衆(大衆社会論者など)と映ずるか，それともプラスの大衆（マルクス主義者など）と映ずるか，のちに近代—現代—超現代（超近代）の軸にからませてさまざまな問題がでてくる。しかしそれはともかく，ハードマンは「大衆」の概念についてであるが，皮肉たっぷりにこんなことを書いている。それは「いわゆる明確な科学的内容をも欠くどうにでも解釈のきく名詞」であって，当の現象を明らかにするというよりも，それを使っているひとの立場をあばくようにおもわれる」といい，さらにつぎのように書いていた。すなわち，「…古い比喩的な含蓄がのこっている。政治的で社会的で，しかも知的な，後悔を知らぬ貴族主義者たちのあいだで，この言葉は，民衆，烏合の衆，賤民，下層民などと同じ意味に用いられている。もったいぶった形容詞をつけると，人道主義者のいう“悩める大衆”になるし，教育者のいう“熱心な大衆”になる。政治指導者にとって，それは選挙のときにのみ必要な，賛同者や後援者を意味するし，また西ヨーロッパの植民地主義者にとって，スエズの東と赤道の南——あるいは Vistula の向こう側の非工業地域，つまり未開の地域の住民こととをたいてい意味しているようである。おもに外的な基準にもとづいていうと，本来は抽象的な概念であって，ある特定の制度的文脈のなかで働く，発言力のある政治的もしくは経済的に組織された少数者と比較されるときのみ，そのときにはじめて色がつくのである。」[14]だから皮肉ないい方をすれば，それは事実の問題でなく，むしろ価値（主観）によって構成され，かつ価値をしみ込ませられた事実の問題といえる。けれども，わたしたちは，大衆の概念がかくも多様な理由の一つは，本筋では「大衆」(あるいは「群衆」）という言葉が革命後のヨーロッパの歴史的文脈の変化——近代プロレタリアートの発生と参政権やその他の諸権利の伸長——に左右された，政治的ないし階級的諸集団のそれぞれの立場やかれらのレトリックと結びつきそれらを反映している事実にある，というように考えている。（わたしたちは，大衆や群衆を歴史的文脈——近代の終末——で問題にしているから，社会学ないし社会心理学の皮相的パターン分類でなく，大衆も群衆——あるいはモッブ——も同一レベルで論じる。だから，この意味では，群衆というのは，大衆の現象的には前期的形態であろう。）

また，群衆や大衆の概念——二つをかりに同義に用いておくが——のいま一つの側面は，一九世紀後半におこった多くの自由主義者たちの態度の変容からきているようである。啓蒙主義の理想は保持されているとはいえ，多くのばあい，かれらの自由主義の標題への幻滅は，群衆や大衆が社会的，文化的および政治的平等への要求のゆえに，それがブルジョワ的秩序への威嚇とみなされればみなされるほど，大きくなっていった。たとえば，トックヴィルや，J・S・ミルの著作のなかにみられる多数者 (the majority) への恐怖は，コンドルセやベンタムの「幸福」(happy confidence) からの敗北を意味していたし，だからかれらをはじめ，アクトンやブルックハルトとような思想家たちが表明した一九世紀後期の自由主義というのは，大衆への恐怖や幻滅をともなった，堡塁とノスタルジアの哲学であった。ブラムソンがいうように，少なくともそれは自由主義の思想家が，大衆社会論者へ移行するところの逆説的なプロセスをしめすものでなかったか。[15]

稲葉三千男は，ガブリエル・タルドの立場について，つぎのようにうまく表現しいる。

「まさにきたらんとする時代は，じつに≪群衆の時代≫」とするル・ボンの説にたいして「群衆は過去の社会集団，家族についでもっとも古い社会集団でしかなく，「現代は公衆の，もしくは公衆たちの時代である」と声高く主張したのはタルドであった。しかもタルドは，公衆についての輝かしい未来を予言する。「最後に形成されながら，民主主義文明の進展についてもっとも発展の途につくだろう社会集団」だと。そこで，「ル・ボンがすでに権力の座にあった貴族の立場から，いままで政治体制の外側に立たされていたプチ・ブルやプロレタリアートの政治行動に不信の念を

チ・ブルやプロレタリアートの政治行動に不信の念を投げかけたとすれば，タルドは当時はじめて政治的に発言権を獲得しつつあったプチ・ブルジョアの代弁者にほかならなかった」という見解もでてくる。当然である。また，清水も，タルドの「公衆」がけっして理性的な思惟が創造的行為の能力を与えられていない（それだけル・ボンの「群衆」に接近する）点を充分注意したうえでのことだが，ル・ボンの「群衆」との差異を強調する。「群衆に比較すれば，公衆を包む空気は明るく澄んでいる。…群衆の観念が，絶望を現わしているとすれば，公衆の観念は，希望を告げるものであろうか。…公衆の観念が作り出されることによって，民主主義は，ル・ボンの加えた打撃から漸く立ち直る機会を摑んだのである。ル・ボンは，民主主義の基礎に群衆を発見し，群衆の非合理性を暴露することによって，同時に，民主主義への不信を表明したのであった。民主主義を擁護しようと欲する人々が，タルドの指した道に従って，民主主義の基礎に群衆の代りに公衆を据えようと試みたのは自然の成行だったに違いない」（清水，前掲書，15-16ページ）。タルドにしてみれば，それはずいぶん望外の，というより意外の，功績にちがいない。

「ヴェルサイユ会議は一括して過激な≪厭うべき教説≫を告発している。保守的なブルジョワジーは，コミューンの事件におびえて，ルイ・フイリップの治世の初期におけると同様に，宗教に向かう。ここから，与党の座にいる知識人たちにとっては，あらゆる領域で一八世紀の分析的傾向をやっつける必要が生じた。個人の上に，総合的な実在性，家族，民族，社会を置く必要がある」（サルトル『想像力』第一章）。おそらく，こういう社会的思想的状況のなかでは，「個人なくしては社会は無に等しい」と個人主義的・社会唯名論的観点を堅持して，デユルケームと対峙したタルドは，時流に抗らい，個人の自然権を，あるいは抵抗権を主張する陣営の一助になっていたかも知れないけれども。

しかし今かりに，かれがプチ・ブルの代弁者となり，民主主義擁護の方向を示唆することになったとしても，それがタルドの本意でなかったことは明らかである。タルドの著書をひもどく人は，タルドが，革命的群衆やストライキ中の労働者たちをすべて犯罪者と同一視していること，革命的事件（大革命やコミューンなど）の意義をまったく認めずに群衆犯罪と公衆犯罪の堆積としか考えていなこと，コントの標語でいうなら（進歩と秩序とでなくて）秩序こそを第一義としていること等々に気づく。これはけっしてプチ・ブルの立場ではなく，地方名望家層*Gentilhomme de province* の立場と断定するのは尚早いかもしれないが，大きくいえば，コーンハウザーのいう貴族主義的批判に属していることに間違いあるまい。

うえは，タルド『世論と群衆』（未来社，1964）の「訳者の解説」（240-42ページ参照）にそっての長文の引用である。

さらに，一九世紀のロマン主義との結びつきもたぶんより重要でさえあるだろう。たとえば一九世紀のロマン主義は，一般的にいって，二つの方向にむかった。すなわち，自由な個人への賛美の方向と地方的，国民的および民族的な有機的ゲマインシャフトへの賛美の方向がそれであった。有機的な民族ゲマインシャフトを理想化することが一九世紀の前半の思想史において一つの重要なテーマであったことや，またそれが社会学それじたいの発達との関係で重要なことなど，いくつかの問題があるが，それはそれとして，やがて前者のロマン主義における個人主義的な要素は，ある変形を経験したのであった。バイロン的な英雄のプロメテウス的な，生命にあふれた観喜の孤独は，一九世紀末の社会学思想においては平均人の孤独(the universal loneliness of the average man)——大衆のなかの平凡な人間の孤独——というものに姿をかえてしまったからである。だからこのような文脈で，ゲマインシャフトの理想化と，伝統的社会から自由でインパーソナルな「都市」の世界に押し出された，孤独で疎外された個人とが，つまり一九世紀のロマン主義のもつ二つの要素が再び結合されることになった。[16] また，こんなところにも，さらにマルクス主義のそれとからまって，群衆や大衆の概念における史的系譜の複雑さがあるようである。

たとえば，例のテンニースの有名な社会学の著書も，さきにみたような世紀末を背景としていた。もはやゲマインシャフトの時代は過ぎ去ってしまったというのである。ゲルマンシャフトからゲゼルシャフトへ，ぎゃくにいえばそこには悪しきロマン主義への危険がないではなかった。「われわれが，温かく保護されていた幼年時代の日々を好んでふりかえるように，われわれはゲマインシ

ャフトのきずながなおまだ強く，それに包まれている人々を保護していた，われわれの過去の社会へ立ちもどろうとする傾向をもっている。テンニエスは，過ぎ去ってしまった時代をふりかえろうとするこうした傾向を，同情をもって，理解していた。しかし，彼はこういう方向づけのなかに横たわっている危険をはっきりと見ていた」。でも，この本が注目されたのは，ずっと後になってからであった。パッペンハイムによれば，「彼の学者としての生涯と『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の運命とは何年にもわたる孤立の物語である。結局においては社会学の思想にもっとも深い影響を及ぼしたものの一つとなったこの著作は，一八八七年に最初に出版されたときには，ほとんど注意されなかった。一般の読者ばかりでなく，その時代の指導的な精神の多くも，この本の意義をとらえることはできなかった。著者の名前はあまり知られないままだったし，彼が大学でかちえた成巧も，長い間にわたって，ごく控え目なものだった。彼の講義にひきつけられたのはごく少数の学生にすぎなかったし，彼が教授の地位を提供されるまでにほとんど三〇年かかったのである。

一九一二年に『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の第二版が刊行されるまでに二五年かかった。その数年後，第一次世界大戦後の，しだいに増大してゆく懐疑主義のムードのなかで進歩の観念に対する疑いがはげしくなってきたとき，テンニエスの思想に対する関心が突如として目覚めてきたのだった。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』がほとんど一夜のうちに“発見”され，数年の期間にその新版が何度も必要になった。しかしながら，出世や成巧に関心をもたなかったテンニエスは，この驚くべき変化によって心を動かされなかったし，間もなくこの突然な喝采に不安を感じだした。それの根底に，科学と合理主義の時代に対する反抗，すなわち人々にシュペングラーのセンセイショナルな『西欧の没落』を迎えさせたような傾向と同一のものがあることを，彼は悟ったのである。現代社会の提出する挑戦から逃げ出そうとしていた学者仲間との不愉快な交際にたえかねて，彼は『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を流行させようとしていた連中たちから遠ざかっていった。こうして，この学者はふたたび孤独におちいった。彼の著作が無視されていた時分と同様に孤独だったのである。」[17]そしてテンニースの恐れは，一九三〇年代に，ナチィズムが「民族ゲマインシャフト」という観念をもちだして，歴史の進行方向を逆転させようとしたとき，悲劇的な仕方で確証された。

さて叙述をもとにもどして，以下おもにブラムソンにそっての引用であるけれども，一般に群衆というのは，ル・ボンによると，批判的思想よりも盲目的な行動にむかう傾向があって，教養ある人たちも群衆のなかでは野蛮人になるし完全に本能の動物となってしまうのである。群衆は「理性によって影響されず，即座の観念連合しか理解できない……論理的な法則は群衆には用がない」のである。だから利口な指導者は，かれがのべたことがらを確認し，同じコトバのくりかえししかしない。かれは所説をのべるが，理性という複雑な鎖を使うことをしないのである。J・S・ミルは，一九世紀の半ばすぎに，かれの『自由論』(1859)のなかで，人間の合理性 (rationality) についてのべながらも，例外があるとしてコドモと野蛮人という二つの例外を指摘していたことはよく知られているが，[18] 群衆の行動は，しばしばコドモや野蛮人の行動と比較されるところであった。たとえば，マクドゥーガルも同様に，群衆は「…極端に激情的で，衝動的で，乱暴で，気まぐれで，無節操で，無定見で，しかも極端に行動でさえある。下等な感情や粗野な感情のみをしめし，極端なまでに暗示にかかりやすく，慎重さに欠き判断を急ぎ，ほんのわずかな，単純で不完全なかたちの理性とてもたない。安易に支配されまたは指導され，自己意識を欠き，自尊心や責任感にも欠けている。しかもかれらは，かれらのじしんの力というものを意識して夢中になりがちである。つまり，そこにわれわれが，無責任で絶対的な力を想像するような，一切が顕在化の傾向にある。それゆえ，かれらの動作は平均人の行動に似ているというより，むしろ気ままなコドモの行動や，奇妙な状況における粗野で情熱的な野蛮人の行動に似ているし，また最も悪いばあい，人間の行動よりも野生の動物のそれに似ている。」と，このよう

にのべていた。[19]

ブラムソンは，ル・ボンと同列にマクドゥーガルを論じているけれども，しかしそれでいいのかどうか。たとえばマクドゥーガルは，群衆心理学者ではない，むしろ進化論の立場から例の有名な「本能論」を展開した人であった。いま，なぜこんなことを問いはじめるのか。ここでは十分にのべられないが，例の清水によると，「マクドゥーガルの於ける人間の非合理性は，逆に，それ自身の内部から社会並びに社会現象を作り出して行く力となる。彼は，人間の内部に，闘争，好奇，自己主張などの本能を認める。これ等の本能は，人間を根本から動かしながら，一定の行動を営ませ，それによって種々の社会現象を成り立たしめる」[20]といっているからである。こういうポジティブな考え方は，のちにパークを理解するうえで重要であるが，それは群衆心理学とはちがった，別な第二の系譜——イギリス，そしてとくにアメリカ——の社会心理学であった。——（また，すぐあとで，このことにはふれる。）

いわく，ル・ボンは群衆について，そのある精神状態，つまり心理学的資質（psychological quality）として群衆を考えていたが，それにたいして，タルドやシゲーレはその集団的要因（group factor）を重視していた，と。…等々。しかし，このようなちがいよりも，はっきりと知っておく必要があるのは，これらの群衆心理の研究は，明らかに病理的でかつ望ましくないものとして「群衆」を考えていたということ。それにさらに一つ大切なことがある。たとえば，うえにみたように，群衆についてのさまざまな見解があるにしても，つまるところ，さきの指摘のように，世紀末のヨーロッパを背景にして生れたものであるという認識である。つまり「群衆に対する恐怖は，民主主義の拡充への恐怖と重り合っている」のであって，群衆心理は「単に心理の問題でなく，社会の，政治の，歴史の問題」であるという認識である。

2

さきにちょっとふれたように，アメリカの社会心理学は，ヨーロッパの群衆心理学のそれとはちがった，別な系譜にあるのだけれども，そうかといって，わたしたちは，ル・ボンやタルドやその他の人たちの伝統をついだアメリカ人がいないなどといおうとしてはいない。じっさい，最初に『社会心理学』（1908）という題名の本を書いたアメリカ人，エドワード・ロスは，タルドから深く影響をうけていた。しかしそのロスの著者においてすら，パークが集合行動の概念を公式化するまえに，かれはその本を書いていたけれども，ちがいは明瞭であった。

以前に，社会史家フロイド・ハウスは，ロスの『社会統制論』（1901）の少なくとも一部はタルドの『模倣の法則』の一節からの自由訳とおもわれるとのべていたが，[21] このことからもわかるように，かれじしんタルド的な伝統のもとに群衆について書き，また流行や熱狂や慣習などは一種の multiple suggestion の結果として考えていた。けれども，ヨーロッパの群衆の研究をそのままアメリカにもち込んだわけでない。ブラムソンによれば，かれは全く矛盾した要素を結びつけようとしていた点で，興味があった。たとえば，社会生活の基礎としての模倣や暗示についてのタルドの見解をうけ入れ，また暗黙のうちに民主主義にたいする非合理主義的な批判をうけ入れながらも，なおかつ，ロスは市民階級の良識や美徳をほめたたえていたものであった。[22]

清水は，群衆心理学とは全くちがう第二の傾向の社会心理学について，つぎのようにいっている。

二〇世紀初頭から今日まで，イギリス，とくにアメリカに発達しきたった第二の傾向は，個人を集団ないし社会との関係において取扱うものである。いわば今日の社会心理学の支配的な形式となっているが，しかし，それは，世間の常識が社会心理学に期待しているものとの間に相当の距離を有している。それは，群衆心理の研究などを通じて作り出された世間の期待に反する問題と構造を持っている。すなわち，この形式の社会心理学は，社会心理という日常の用語が指示する一群の事実を正面から追求しようとする意図を持つよりは，むしろ，社会あるいは社会現象の根源を人間の内部に探り，また，人間の成長および形成のうえに働く社会的諸力を明らかにしようとする方向へ進んでい

る。……

しかしながら，西洋思想の歴史に注意すれば，このような問題は，たとえ心理学という名称を帯びているにしても，古くから多くの学者の論ずるところであったばかりでなく，かえって，それは近代における社会科学の伝統をなしておったと云わねばならぬ。近代の初期以来，一九世紀の前半まで，この問題は常に社会科学の基礎に横わってきたものである。一九世紀の前半，資本主義社会固有の矛盾と結びついた社会的諸事情のため，社会的および歴史的な実体が超個人的な力として現われるまで，人間的自然（human nature），すなわち，人間の自然的要素から社会および社会現象を演繹するという方法は，じつに，不動の地位を占めてきた。多くの学者は，人間の内部に闘争の傾向，利己心，同情の本能などを認め，それによって社会の成立をはじめ種々の社会現象を説明してきた。このことは，一面，事物を究極の自然的要素にまで分解し，あらためて，この要素の再構成をとおして現実の事物を把握しようとする近代科学の手続きに従うものであると同時に，他面，個人を積極的原理とする資本主義社会の構造によって特殊の意義を与えられたものであった。いずれにしても，社会心理学上の第二の傾向は，西洋諸国にとって親しみ深い問題および方法を新しい形式において継承するものと云うことができる。（清水，前掲書，17—19ページ参照）

さて，アメリカの社会には，例の封建的な伝統の欠如とか当初からの自由主義の伝統とかのゆえに，ヨーロッパのような反民主主義的な群衆心理をはぐくむふるい地層が露出していなかった，といわれている。だから，シゲーレが提出したような反議会主義のレトリックはアメリカの社会学者たちのあいだにはおよそ馬耳東風といった有様であったし，二〇世紀のはじめにアメリカで刊行された社会心理学の書物で，一九世紀の最後の十年間にヨーロッパで書かれたものからうかがえる，これら保守主義者たちの群衆への情熱的な関心を反映している内容のものは全くといっていいほどない。あとでみるように，それは集合行動のかたちで特殊アメリカ的な発展の形態をとるが，この集合行動の分野は，パークが，アメリカ最初の社会学教科書といわれた『社会学の科学への序説』(Introduction to the Science of Sociology,1921)のなかで，はじめて概念化したものであって，それはその後ハーバート・ブルーマーの一九三九年の概括的な論文[23]によってさらに発展させられた。また，F・B・カルプフの『アメリカ社会心理学』(American Social Psychology : *ItsOrigins, Development and European Background*, 1932)以来，社会心理学の一分野としても認められた。とはいえ，その後一九五七年になるまで，つまりR・N・ターナーとL・M・キリアン編の『集合行動』(1957)——論文集——が刊行されるまで，一冊の単行本も刊行されなかった。社会学や社会心理学の各分野は過去二・三〇年間にめざましく発展したけれども，それに比べてこの集合行動の分野は最近まで当初のままの状態でとり残されていた。たとえば，さきのブルーマーは一九五七年に，この状態を顧りみて，つぎのようにのべていた。「集合行動の分野は有効な計画をもっていなかった……過去二〇年間に個々のトピックについての知識を多く加えたけれども，それは集合行動の一般的な分析になんら重要な貢献をしなかった。」[24]と。〔ごく最近では，N・J・スメルサーが『集合行動の理論』(Theory of Collective Behavior, 1963)という，このテーマではおそらくはじめての本格的な単行本を公刊した。〕

さて，アメリカに，その研究の伝統らしきなにかをもたらした最初の書物といえば，疑いもなく，パークのさきにあげた一九二一年の社会学教科書（バージェスとの共編）であった。かれの経歴をスケッチしてみると，かれのこの方面への関心はヨーロッパ留学によって刺激されたようであるが，それまではジャーナリストという学者としてはちよっと特異な経歴の持主であった。かれは一八六四年のペンシルバニア生れ，そしてミネソタの小さな田舎町で育った。ジョン・デューイの教えをうけたというのはミシガン大学在学中のときであった。卒業後は，ミネアポリス，デトロイト，デンバー，ニューヨーク，それにシカゴなどの大都会で新聞の報道員や編集者として働き，結果的には，そのときに，のちの都市社会学への鋭い眼識を養っていた。大学へもどったかれは，ハーバードの大学院で心理学のM・Aをとるが，その当時そこには，ムンスターバーグ，ロイス，ジェームズなどの連中がいた。そして一八九九年に

アメリカを離れドイツに渡り，ベルリンではゲオルク・ジンメルの講義を聞く。それから翌年にかれはシュトラスブルグの大学にゆき，そこではヴィンデルバントの講義にでた。ヴィンデルバントに心酔していたのであろうか，教授がハイデルベルグに移ったのでパークもそのあとをおう。一九二〇年のことであった。当時の，いわゆるラインラントへの運動——ベルリンから離れるというシンボリックな思想運動——は実証主義批判を表明するもので，[25] うえのことからもわかるように，パークもそれに参加していた様子である。そしてかれは，このハイデルベルグで学位論文 *Massen und Publikum*, 1904 を書くことになった。この論文で，パークの群衆への関心は正式なかたちをとり，シゲーレのような思想家たちが以前にはむとんじゃくに扱っていた「群衆」と「公衆」を明確にしようとした。のちに，つまり十数年後に前述の社会学の教科書を準備したとき，かれは再びこの分野へ関心をむけたのであった。ちなみにパークがシカゴ大学教授に就任したのは一九一五年であり，そして，かれがこの年に書いた「都市」(The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment, *Amer. J. Sociol.*, March, 1915) という論文は，これまでタマス＝ズナニエッキの『ポーランド農民』(1918—20) がそれとしてよくあげられたけれども，こんにちからみれば，アメリカ社会学の第二期(1915/18—1937) がはじまるメルクマールの一つとしてみなされるほどの，新しい問題をもった好論文であった。

パークは集合行動をどう定義したか。あいにく，かれの定義は，そのあいまいさでは傑作であって，いうなれば「集合的」であると定義される通常の社会行動と，通常の社会ルールや慣習が破壊されたとき，ないしそれらの状況が欠けたときにおこる特定の種類の行動とを，かれは区別しなかった。[26] しかしぎゃくにいえば，こんなところにかれの特色があったともいえる。

パークの定義。「個人々々の集り必ずしも社会ではないし，その集合 (collectivity) という単なる事実だけでは社会とはいえない。しかし他方，たとえ人びとのあいだの社会的距離に開きがあったとしても，街角や駅などでほとんど偶然なかたちで直接あい集るとき，お互いに存在を意識するという単なる事実だけで強い影響がおこることがあって，しかもその行動というのは社会的かつ集合的である。それは，各々の個人の思考や行為の結果が多少ともすべての他者の行為によって影響されるという意において，少なくとも社会的であるし，各々の個人が，各々が共有している精神のムードとか状態とかの影響のもとで，またみんなが全く無意識にうけ入れている慣習に従がって，さらに各々の存在が他者に強いるところのものに従って行為するかぎり，そのかぎりにおいてそれは集合的である……いずれのばあいでも…生活のもっとも偶然的な関係においてさえ，人びとは，かれ個人の島で各々があたかもロビンソン・クルーソーのように独りぼっちで生活しているかのように，他人の面前ではふるまわない。お互いが他者を意識するという，この事実こそ，さもなければダメになるか忘れ去られるところの慣例や慣習を維持しかつ補強するところのものなのである。それゆえ，集合行動 (collctive behavior) というのは，共通で集合的である衝動，いいかえれば，社会的な相互作用の結果であるところの衝動の影響のもとにおける諸個人の行動のことである。」[27] これがパークの定義である。

さらに，つづく「社会不安と集合行動」(social unrest and collective behavior) の節の一部をつぎに引用してみよう。かれはこんなふうにのべていた。「集合行動のもとに基本的な形態は，ふつう“社会不安”としてしめされている。個人の不安は，一個人から他の個人へ伝えられるかあるいはそのようにおもわれるとき，しかしより特殊的には，家畜などが群をなしてウロウロ歩き回るのにも似たのにかが生じたとき，それが社会的になるのである。……社会不安は，それがただちに既存の慣例の破壊や新しい集合行動の用意を意味するという点で，重大である。社会不安は，もちろん新しい現象ではない。しかしながら，……それはとくに現代生活の特質であるといってもおそらく間違いではあるまい。現代生活の状態と原始時代の状態とを比べてみれば，このことの正しさがわかるとおもう。」[28] そしてつぎに，未開の部

族にみらそる排他的でゲマインシャフトリッヒな性格の特質についての記述をサムナーの『民習論』(1906) からの引用にたよりながら，かれパークはそういった地方集団 (local group) の孤立性はもはや崩壊しつつあることを強調した。また，それにともなって，「現代の生活諸条件における第一の効果は，外国や遠距離の人びとのあいだの経済的相互依存を増加させかつ複雑にしたこと，すなわち，国家間の諸関係にかんするかぎり，距離を破壊し，世界を小さく緊密にしたことであった。第二の効果は，家族は，地方的および国家的紐帯を破壊したことであり，そして個人を解放したことであった……こんにちの世界を観察すれば急激な変化がいたるところで進行中であることがわかる。ヨーロッパばかりでなく，アジアやアフリカにおいても，新しい文化的接触がふるい諸文化を浸触し破壊した。その結果は一切の社会的紐帯をルーズにしたし，また，社会を個人というアトムに還元した。このように自由になったエネルギーは世界的な激動をもたらしたのである。ふるい結合関係から解放された個人は，すべて新しい結合関係のなかに速かに入ってゆく。この混乱から新しい未知の政治的や宗教的な運動がおこるのであるが，それは新しい社会秩序をもとめる人びとの暗中模索を意味するものである。」[29]

だとすると，ヨーロッパの群衆心理学とはだいぶちがう。どこがちがったのだろうか。おこった重要な変化といえば，群衆やモッブや大衆はもはや必ずしも病理的だとは考えられていないということ，ひとくちにいえばこういうことのようである。それは，そういう意味でマクドゥーガルに似ているといえるし，すごく期待をかければ，全く別ものだけれども，マルクスの希望につうずるとさえいえる。ようするに清水のいう第二の傾向の社会心理学の特色をしめしているということであって，そこにはパースペクティブの質的なちがいがあった。「第一の傾向（群集心理学—引用者）にとってル・ボンが果した役割は，第二の傾向にとってマクドゥーガル (William McDougall, 1871–1938) が果している。……先ず，吾々の注意を惹くのは，絶えず第一の傾向の背景であった個人が，第二の傾向では最初に現われている」(20ページ) ことであった。そして個人は「自己の内部から社会及び社会現象を生み出して行く」のである。集合行動という現象はただ単に，ル・ボンとおけるような文明の破壊を意味せず，パークにおいては，建設的な可能性をもっものとして説明されている。またかれは，スペンサーやサムナーの著作のなかにその方法が見出されるような，一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての進化論的な概念の影響のもとに，新しい制度の発端，つまりふるい制度のもとに充足されないままに残されていた諸欲求を充足させる新しい社会秩序のきざしを表現するものとして，群衆行動，すなわち「集合行動」をみたのであった。[30] だから集合行動というのは閉じ込められた諸欲求を充足させる新しい制度の苗床であり，繁殖地なのである。そしてそこには，制度の生活環 (life cycle) という社会ダーヴィニズムの naturalistic な考え方があった。いわば集合行動というのは，その生活環のもっとも初期の段階で現われるものである。たとえばパークは，さきの書物のなかでつぎのように書いている。すなわち，「この章の題材は，(イ)社会的伝染，(ロ)群衆，および(ハ)大衆運動の諸類型といった見出しのもとに整理された。題材の順序は，一般に制度の進化の順序に従っている。社会不安はまずはじめにコミュニケイトされ，つぎに群衆や大衆運動のかたちをとり，最後に制度に結晶するのである。ほとんどの単独な社会運動——婦人参政権，禁酒，プロテスタンティズム——の歴史は，細部にわたってでないとしても，一般にこの発展的な変化にぴったりと当てはまっている。最初，一般にばく然とした不満や苦悩があり，それから激しい，混乱した，無秩序な，だが情熱的で民衆的な運動がおこり，最後にその運動は形態をとり，リーダーシップや組織を発展させ，教義や信条を公式化する。けっきよく，それがうけ入れられ確立され，かつ制度化されるのである。その運動は消滅するが，しかし制度はのこるのである。」[31]

シゲーレも，やはり「群衆は社会集団の第一段階であり，他のすべての集団の源泉である」という考え方をとっていた。群衆は，そこからセクト (sects) が「卵からヒヨコがかえる」ように生れるところの，一種の初歩的な集団であるといった

考え方は，パークがシゲーレから受継いだものである。しかしながら，パークはヨーロッパの理論家たちの群衆行動についてのどの考え方とも全くちがった，ある別な考え方をそれに結びつけたものであった。つまり明らかに重要な文脈の変更がなされた。たとえば，二〇年代のアメリカ社会学の一つの特色といえば，構造 (structure) よりも過程 (process) の立場から，いわば問題を階級関係のカテゴリーよりも「行動」や「行為」のプラグマティックな立場から議論したことにあった。そしてそのような立場は，ほとんどが naturalistic であって，また相対論的でもあった。たぶんそれは，アメリカの自由主義的なオプティミズムがそうさせたのであろうが，そういったアメリカの風土がパークに反映していた。だから，集合行動の概念は，ヨーロッパとちがったこの国の風土がアメリカ社会学独自の発展にどんな影響を与えたかを知るための一つのインデックスという意味で，はなはだ有益な概念である。

大衆の蜂起といった現象は，ヨーロッパでは既存の秩序への威嚇や挑戦であったけれども，ここでは群衆行動は，その初期の段階として，制度の進化論的な文脈でおき換えられた。どんな制度でも，そういった初期の段階をもち，その後の盛んな成長期と持続期，そして最後に没落期が続くというものであった。[32] さきの生活環という発想である。だから「大衆行動」(mass behavior) の概念も，そのほとんどが集合行動の概念というヨリ大きな文脈のなかにはめ込まれていた。たとえばパーク門下のブルーマーの一九三五年の論文 ("Molding of Mass Behavior Through the Motion Pictures", *Publications of the American Sociological Society*, vol. 29, 1935) がそうであって，それによると，大衆行動は「初歩的な集合行動」とみなされ，特定の階層とは必ずしも結びつかないとされた。[33]

さて，ブルーマーの大衆行動の理論においては，大衆はバラエティに富んだ地方文化の出身者たちであった。つまり大衆というのは，社会的地位，職業，家庭生活，コミュニティおよび地方の伝統などで，それぞれ異質の背景をもった複数の個人から構成されているのである。そしてかれは，この仮説にもとづいて，大衆行動の領域は地方文化 (local culture) の領域の外側にある，と結論した。一般に大衆行動の対象や経験は，個人を包んでいた地方文化，いいかえれば民俗社会 (folk community) のアウトサイドにおこるものである。「生活の形態や範囲が秩序づけられた民俗社会においては，大衆行動はまずおこらない。それがおこるのは，そのような民俗的な生活様式からの脱線を意味している。大衆行動という形態は，われわれが歴史から知っているように，複雑で異質的な社会とか，または瓦解の状態にある民俗社会とかに見出されるということである。」[34] このように大衆行動を定義するための基礎を与えたのち，つぎにブルーマーは大衆行動の二つの側面を指摘している。すなわち，民俗文化や地方文化によって型にはめられた要求や先入主を超える目標とか利害とかをもつ大衆行動の関心というものは，破壊的な側面と建設的な側面の二つをもっている。大衆行動は地方文化を超える一方，それにたいする挑戦でもあるという意味で，それは破壊的である。「大衆の注意をひくものは革新や侵害であって，つまり地方集団の生活構造からは生れてこない，また，地方の慣習によって指図されない経験がそれである。大衆的影響は，つねに個人を地方集団からある程度まで切り離していて，だから，そのような影響が働くとおもわれる個人的経験というのは，地方生活によっては充足されない経験の領域なのである。」[35]

ブラムソンによれば，破壊的な側面の強調のなかにヨーロッパの影響がみられることを指摘するが，しかしながら，かれもまた指摘しているように，建設的な側面となると，まさにパーク的なそれであった。つまり，地方文化が面倒をみなかった諸要求を充足する努力のたかまりを意味しているし，それはまた，生活領域の拡大とそのなかに新しい組織を導入するために役に立つのである。「集団からの個人の疎外は，さらに広い世界へのかれらの参与——たとえ貧弱とはいえ——を意味している。個人の意図が地方的な集団生活から離れたところにむけられる事実は，まさにその志向が，より大きな世界や，より広い範囲の存在や，また，新しい秩序にいくらかむけられることを意

味している。大衆行動というものは，もしわれわれが，個人の性向，欲望および欲求が地方集団における生活の諸形式によっては十分に充たされないという意味を表わしていることを知っているなら，この点についてもっとよく理解できよう。大衆行動はそれがどんなに未熟なものであったとしても，新しい生活秩序の形成の準備的な企てをしめしているようにおもわれる。大衆行動は固定的な民俗的生活から新しい社会秩序への変化において必然的にともなう，活動の環 (the cycle of activity) のもっとも初期の一部をなすものと考えられる。」[36] だから，ブルーマーによれば，大衆行動とは，地方文化の解体，新しい秩序の発端，および地方文化では与えられない満足な生活をもとめる個人の努力の現われであった。

またかれは，大衆行動それじたいの性質を定義して，大衆行動とは本質的に異質で個人的には見分けのつかぬ諸個人の同質的な集合 (homogeneous aggregate of individuals) であると考えていた。「この大衆の同質性を，大衆のなかでは各個人は匿名で定められた場所をもたないというように，いいかえてもよい。かれらは，ちがった地方集団や社会環境からの出で，それゆえお互いに知らないから，いくぶんはその意味で匿名的だし，かれらのあいだにコミュニケーションや会話が実際に疏通を欠いているのだから，なおさら匿名的である。しかし，それのおもな理由は，大衆としてのかれらは，なんらかの身分や認められた地位をもたないということにある。大衆は，社会集団や，社会や，あるいはコミュニティのごとく組織されていないし，安定した生活の枠組や，確立した社会関係の形式や，また各個人への定められた役割配分というものがない。そのかわり，すべての筆者が認めているように，不完全で形がはっきりしない……すべてこれは大衆は伝統や行為のきめられた規範ないしは形式や，個人間の関係を調整する礼儀や，また期待ないしは欲求の体系をもたないという意味において文化がないというように，別な表現をすることもできる。」[37] 大衆のなかの諸個人は，孤独で，匿名で，バラバラであって，かれらのあいだには相互作用を欠くけれども，逆説的にいえば，個人々々の意図が共通対象にむけられているという点で，かれらは一体である。つまりかれらが togetherness (一体) だということは，各自がめいめいじぶん自身の欲求の充足をもとめた結果であって，結果的に偶然そうなのであって，ブルーマーによれば，「大衆行動の形式は，逆説的にいえば個人的な活動の方向によってきめられ，一致した行為によってではない……これらの行為の個人的な方向は……出発点において満場一致の方向で輻合し，それによって大衆の行動を非常に効果的にする。しかし，これは同意とか相互作用とかの結果ではない。それゆえ，大衆行動は個人的な行為の方向の寄集りである……大衆はわけのわからぬものであって，その性向や感情……は，あいまいで水路づけがなされていないし，かれらの観念やイメージは無定形で混乱している。」[38] しかしながら，大衆のなかの各個人の撰択は究極には輻合して大衆行動に，つまりそれが大衆的性格なるものを与えているのである。ブルーマーによれば，これらの撰択は地方文化のレベルにおいては意識されない，漠然とした不満を充足するための一つの可能性を提供している。また，「大衆行動は，個人的な行為の方向の寄集りであるとはいえ，重要な意義をもつものになってきている。これらの方向を輻合させるなら，大衆の影響力は，やがて大衆の撰択における関心の変化という結果がともなう，制度への広範囲な影響がしめているように，巨大なものである。そのような関心や趣味の変化は政党を解散させるばあいもあるし，営利会社を破産させるばあいもありうるのである。」[39]

ブルーマー理論からくるイメージは，やはり部分的にはヨーロッパ的なものである。けれども，かれのなかのポジティブな要素は，コミュニティの崩壊の，むしろ可能的に解放的な効果を強調している点であって，ブラムソンによれば，まさしく「自由主義的なエトスの表現」であった。こういうポジティブな側面は，すでにみたように，また，「エヴェレット・ヒューズが書いているように，パークの強調するところでもあった。例のヒューズの「序文」" Preface," by E. C. Hughes in R. E. Park, *Human Communties*, 1952) によれば，「かれの真の情熱は努力家としての人間に

あった。そして，都市と，生活がより安全な，スムースに運ばれているようなコミュニティとを著しく対照して描いたところの多くの人たち——かれもそう描いたが——とは異って，パークの撰択は，かれがそれについてのべているように，すべて人間が「独力」である都市においているのである。[40] だが，じつをいえばヨーロッパの思想家，とりわけ大衆社会論の先駆者たちが悲しんだのは，まさにこの事態であった。人間が「独力であること」(“being on his own”) を，かれらは「解放」とみたのでなく，むしろ「疎外」とみたのである。一九世紀の大衆社会論の先駆者たちは，それを中世的統合——すなわち，歴史家がこんにち理念型としてでさえ，かなりの疑問をなげかけている「黄金時代」の概念にしめされていた神の恩寵——を失った悲しむべき状態と考えていた。

ヨーロッパの大衆社会論は，包括的で全体を特徴づける神秘主義であるといわれ，それにたいして，パーク＝ブルーマー理論は，個人という部分や分子の行為を強調している。このちがいはさきの清水の指摘したちがいでもあったし，またある意味では，それはヨーロッパ社会学とアメリカ社会学のちがいでもあった。たとえばカール・マンハイムは，例の一九三二年の「書評」をとおして，アメリカ社会学者の個人主義的な自由主義はフロンティアの存在や自由な社会構造に基礎をおく一種の贅沢である，という意味のことをのべていたけれども，[41] それはアメリカ社会学への皮肉の意味ばかりでなく，アメリカ的思考そのものへの批判の意味も含まれていた。個人という分子の独立を強調していて，そういう自由を可能にしているヨリ大きなコンセンサス (consensus) が無視されている。そして，それらのことが，階級概念やエリート概念や，つまりヨーロッパの社会学を規定しかつそれに一つの理念を与えているような「身分社会」(*Standesgesellschaft*) という基本的秩序にたよることなしに，社会学の研究を行えるようにしているのである。しかし，うえのようなちがいがあるにもかかわらず，パーク＝ブルーマーの理論には，集合行動という特殊アメリカ的な概念を展開した反面，じっさいには，ヨーロッパ的な発想も含まれていた。なぜなら，かれらの著作のなかには，たとえば，インパーソナルで無関心な都市的環境における“個人の孤独性”を強調するような，「社会学的ロマン主義」(sociological romanticism) が浸透してきているからであった。こういうことが指摘されている。[42] これは，いったい，どういう意味なのか。かれらのばあい，必ずしもそうだとはいえないけれども，一般にロマン主義というのは，一九世紀のヨーロッパの政治的文脈からすれば，反自由主義的な保守反動の性格をもっていたし，それは表面は，ゲマインシャフトリッヒな秩序への郷愁というポーズをとった，じつは「危険な思想」(？)でなかったか。

ブラムソンは，アメリカの第二期の社会学者について，つぎのように書いている。すなわち，「アメリカの社会学者たちに特質的な，社会ないし政治哲学として現われたのは，サムナー的な“保守主義的”自由主義ではなかった。むしろそれは，まえにわれわれが，パークのような思想家との関連でのべたところの二つの意味を含んだ哲学であった。つまり，自由主義者であるがしかし同時に，一九世紀のふるい保守主義の思想家たちの追憶にふけるようなヤリ方で，その社会学のなかで集団結合や身分や合意などを強調したそれであった。第二世代の社会学者たちは，往々にして産業化の影響のもとに“解体しつつある”アメリカ人の生活の諸側面に関心をしめした，“無自覚”な自由主義者たちであった。かれらは，じぶんたちを囲んでいる社会の分析のために採用した概念のあるものに，保守主義的な含蓄があることに気づかなかったように，その自由主義も，つまり機会均等や個人主義やデモクラシーなどの基本的な仮定についても，ほとんど意識しなかった。ライト・ミルズは，たとえば，一切の変化が好ましくないということを意味したところの医学的類推や均衡概念をもち出して，アメリカの“社会病理学者たち”が，中産階級に適したイデオロギー，つまり産業主義に結びついた変化の現象にたいしてスモール・タウンの諸規範をどのように展開したか，その仕方について説明していた (Mills, “The Professional Ideology of Social Pathologists,” *Amer. J. Sociol.*, Vol. 49, No. 2, 1943——引用者注)。」(Bramson, *op. cit.*, pp. 90–91) と。

以下，すごく図式的な叙述だけれども，アメリカ資本主義は，いわゆる「二〇年代の繁栄」—産業化や都

市化—と，それにもとづく三〇年代の不況によって，ふるきよきアメリカの地盤が最終的に分解し，新しい社会階層，つまり新中産階級が出現した。この現象はかっての一九世紀末の旧中産階級の危機と比較され，さらにそれを徹底させたかたちであった。そしてさきのときには，アメリカはアメリカ社会学の父，レスター・ウォードの社会学を誕生させた。それは社会改良の社会学—旧中産階級の自己主張とでもいえるもの—であった。それから，繁栄の二〇年代には社会学に「一種の贅沢」が生れたけれども，やがて三〇年代の不況はアメリカ社会学の基調を変えるのである。それはどういうことかというと，まずそれは社会学的ロマン主義のかたちをとって現われた。つまり秩序の社会学が生れてくるのである。だいたいの線としては，ニスベットの「変化から秩序へ」というアメリカ社会学における基本的な指向の変化の指摘によるけれども (R. A. Nisbet, "Conservatism and Sociology," *Amer. J. Sociol.*, Vol. 58, No. 2, 1952)，より具体的には，それはまず第一次集団の再発見 (the discovery of primary Groups) のかたちで，三〇年代の資本主義の危機や新しい社会層を背景に進行してくるようにおもわれる。たとえば，例の有名なホーソン実験をはじめ，「アメリカ兵」の研究とか，それにヤンキー・シティ・シリーズなどがそれであるが，これらは，いわゆる「第一次集団の再発見」とよばれる一連の研究であった。わたしたちは，これらを**社会学的ロマン主義**のムーヴメントとよんでいるが，さらにこの仲間には，アメリカのマス・コミ研究—The People's Choice, 1944—もはいるとおもわれる。（カッツ＝ラザースフェルト『パーソナル・インフルエンス』竹内訳，培風館，1965，第一部・参照）。また，アメリカ社会学における基本的指向の変化は，別なかたちで，パーソンズの大著『社会的行為の構造』(1937)—アメリカ社会学の第三期のはじまりをしめす一つの重要なメルクマール—となって現われた。つまり，そこには実証主義（マーシャル，パレート，デュルケム）とドイツ観念論（ウェーバー）という二つの系譜から「主意主義的な行為理論」の発展を追求するかたちで，いわば「制度的な価値」(institutional value) や「倫理的な規範」(ethicalnorm) をもとめる，じつは全くヨーロッパ的な秩序の社会学思想—のちに，秩序への文化人類学的なバイアスと結びつく—がみられるのである。

さて，さきのヒューズの性格描写は，パークの個人主義的な自由主義の側面を強調していたようであるが，ブラムソンによれば，かれのその解説が序文としてついている同じ書物のなかの論文 ("Community Organization and the Romantic Temper," reprirted from *Social Forces*, May, 1925) で，それと全くぎゃくの叙述がみられると，つぎのように指摘している。たとえばパークは，アメリカ人の成巧競走にも臆せず，かたい組織を維持した移民集団のことを「成巧した」移民集団であるとのべていた。かれのここでのイメージからすれば，これらの集団の個々のメンバーが「独力で」やった事実を強調せずに，むしろ必要な社会的ないし感情的なサポートを与えている閉鎖的な結合のコミュニティの一部であることを強調している。そして，ユダヤ人集団や日本人集団が，そこではとくに引き合いにだされていた。また，渡り鳥労務者は，地位をもとめる競争にいや応なしに誘い込むアメリカ人の非妥協的な態度のシンボルとしてながいこと考えられていたけれども，パークによれば，「渡り鳥労務者は，ようするに行暮れたフロンティア・マンである。つまり，フロンティアが過去のものとなり，もはや存在しないいま，たんに時間と場所のフロンティア・マンに過きない」といい，時代錯誤だといっていた。[43] そして最後に，パークはかれじしんや同僚の社会学者のことをのべて，「われわれは，それの眼がつねに地平線内にむけられた，つまり，限界を認識しその範囲内でものごとをおこなう最近のロマン主義とは反対の方向の，一つの運動のイニシャチィブをとろうとして新しい地方精神 (parochialism) を促進しつつある」[44] とその立場を結んでいた。パークの都市の概念には，みんなが顔み知りである農村の生活状態——歴史的事実としてよりも，社会学者の想像力のなかに生き生きとした表現が見出されるような牧歌的なゲマインシャフト——を再びつくり出さうとする傾向がいたる処でみられるし，それはまた，そういった考え方によって特徴づけられる面があった。そして，ブラムソンによれば，「こういうパークの見解に強い影響を与えたのは，たとえば，テンニースの *Gemeinschaft und Gesellschaft* や，ゲオルク・ジンメルの "The Metropolis and Mental Life" や

"The Stranger" などによって例証されるような，一九世紀後半のドイツ・ロマン主義の社会学である」[45] というようなことをのべていた。

注 1) Leon Bramson, The Political Context of Sociology, *Princeton Univ. Press*, 1961, p. 47.
2) *Ibid.*, p. 48.
3) ルイス・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』有賀・ほか訳，有信堂，1963，229ページ。
4) K. Mannheim, "American Sociology," in M. Stein & A. Vidich (eds.), *Sociology on Trial*, Prentice-Hall, 1963, p. 8.
5) Bramson, *op. cit.*, p. 50.
6) *Ibid.*, p. 50n. (C. Strout, "Liberalism, Conservativism and the Babel of Tongues," *Partisan Review*, Winter, 1958, pp. 105–106.)
7) W. コーンハウザー『大衆社会の政治』辻村訳，創元社，1691，18ページ。
8) 清水幾太郎『社会心理学』岩波書店，1951，8—9ページ。
9) Bramson, *op. cit.*, p. 53. テーヌの影響については，E. Shanas, "The Nature and Manipulation of Crowds," Unpublished M. A. thesis, Univ. of Chicago, 1937; G. Tarde, *L'opinion et la foule*, F. Alcan, 1901, pp. 181, 191–92; Le Bon, *The Crowd*, T. F. Unwin, 1896, pp. 21, 71; S. Sighele, *Psychologie des sectes*, Bailliere, 1895, passim; W. McDougall, *The Group Mind*, Cambridge Univ. Press, 1927, p. 46 など参照。(*Ibid.*, p. 53n.)
なお群衆の研究は，専売特許にかんするル・ボンとシゲーレの泥試合なしには進展しなかった。ル・ボンは1895年に『群衆』をパリで公刊した。そして翌年，英語に訳された。かれは1894年には，このテーマにかんする諸論文を公けにしていた。しかしながら，シゲーレの *La foule criminelle*, 1901 の序文で，かれは，剽窃したといってル・ボンをヤリ玉にあげている。しかし歴史は，ル・ボンに，群衆の研究の普及者としての名誉を与えているようである。(K. Young, "Social Psychology," in H. E. Barnes, ed., *History and Prospect of Social Sciences*, Knopf, 1925, p. 159.)
10) J. P. メイヤー『フランスの政治思想』岩波書店，1956，158ページ。
11) Bramson, *op. cit.*, p. 54.
12) Le Bon, *The Crowd*, Ernest Benn, 1947, p. 31. (*Ibid.*, p. 54.)
13) 南　博「群衆行動と大衆運動」『社会心理学の性格と課題』勁草書房，1963，128ページ。
14) J. B. S. Hardman, "Masses," in *Encyclopedia of the Social Sciences*. (Bramson *op. cit.*, p. 27.)
15) Bramson, *op. cit.*, pp. 29–30. たとえば J. S. ミルの立場について，水田洋は「ミルは，かれら（ビクトリア・ブルジョワジー—引用者注）を批判することによって，かれらの成金貴族趣味と平行して知的貴族主義と移行してゆく。ミルを，いわゆる大衆社会論の先駆とするのは，このような知的エリートの立場をさすのである」とのべている。さらにミルは，また他方で，多数者＝「世論」への恐怖をもっていた。(『イギリスの近代政治思想』 世界思想教養全集6，河出書房新社，1964，参照)
16) *Ibid.*, p. 30.
17) F. パッペンハイム『近代人の疎外』岩波新書，1960，74–75ページ。
18) Bramson, *op. cit.*, p. 55.
19) *Ibid.*, pp. 55–56. (W. McDogall, *The Group Mind*, Cambridge Univ. Press, 1927, p. 45.)
20) 清水，前掲書，22ページ。
21) F. N. House, *Development of Sociology*, McGraw-Hill, 1936, p. 320.
22) Bramson, *op. cit.*, pp. 58–59.
23) H. Blumer, "Collective Behavior," in A. M. Lee (ed.), *Outline of Sociology*, Barnes & Noble, 1946, 初版本 (edited by R. E. Park) は1939年。(*Ibid.*, p. 57n.)
24) *Ibid.*, p. 85.
25) H. S. Hughes, *Consciousness and Society: The Reorientation of European Social Thought, 1890–1930*, Knopf, 1958, p. 47.
26) Bramson, *op. cit.*, p. 60.
27) R. E. Park & E. W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*, Univ. of Chicago Press, 1921, p. 865.
28) Bramson, *op. cit.*, p. 61.
29) *Ibid.*, pp. 61–62.
30) *Ibid.*, p. 62.
31) *Ibid.*, pp. 62–63.
32) *Ibid.*, p. 64.
33) *Ibid.*, p. 64. (Blumer, *op. cit.*, pp. 115–117.)
34) *Ibid.*, p. 65. (Blumer, *op. cit.*, p. 116.)
35) *Ibid.*, p. 65. (Blumer, *op. cit.*, p. 117.)
36) *Ibid.*, p. 66. (Blumer, *op. cit.*, p. 117.)
37) *Ibid.*, p. 67. (Blumer, *op. cit.*, pp. 118–119.)
38) *Ibid.*, p. 67. (Blumer, *op. cit.*, p. 119.)
39) *Ibid.*, p. 68. cf. Blumer, "Collective Behavior," in A. M. Lee, ed., *op. cit.*, p. 186.
40) E.C. Hughes, "Preface," in *Human Communities: The Collected Papers of R. E. Park, Vol. II*. Free Press, 1952, p. 6.
41) Mannheim, "American Sociology," in M. Stein & A. Vidich, *op. cit.*
42) Bramson, *op. cit.*, p. 70.
43) Park, *Human Communities*, p. 72.
44) *ditto*.
45) Bramson, *op. cit.*, pp. 71–72.

—1965. 4. 24—